

# 西光寺だより

第四十二号 平成二六年 二月一日発行

お正月も過ぎ、日常が戻ってきたかと思うと早や二月を迎えました。二月は一年のうちでもっとも冷え込みますが、梅の花がほころび始める頃でもあります。

梅の花は、桜と違って咲き方も散り方もゆつくりとしており、良い香りとともに春まで導いてくれているようです。「馥郁(ふくいく)たる梅の香り」という言葉があります。とても良い香りの意味ですが、梅にこの表現が使われるのは、木の花がほとんど咲いていない冬にふと漂うその香りに、春が近いことを教えてくれる特別な意味が込められているように思います。

万葉集でも梅は萩の次に好まれて使われた花だったようです。その中のひとつにこのような詩が詠まれています。

「万代(よろずよ)に、年は来経(きよ)とも、梅の花、絶ゆることなく、咲きわたるべし」

「いつの世までも梅の花は絶えることなく咲き続けるのでしよう」という意味ですが、今より千二百五十年ほど前に作られたであろうこの作者は、今の世も梅が人の心を楽しませてくれていることに思いを馳せていたのでしょうか。

ずっと昔に感じられた思いと同じように梅の花を見られることに、繋がってきた命の尊さを思わずにはいられません。

梅の香りに出会ったら、花を愛で木を撫でて、しばし悠久の歴史を感じてみたいと思います。



## ◆二・三月の行事◆

・ 二月 四 日 (火)

茨木東組第六期連続研修会

(西光寺から四名のご門徒が参加されます。)

常稱寺

・ 三月 二十一日 (金・祝)

仏教婦人会総会

午前十一時三十分から追弔会 (正信偈)

午後十二時 ～ お齋

午後一時 ～ 総会

西光寺本堂

・ 三月 二十九日 (土)

追弔会・春季永代経法要

午後二時・午後七時

\*なお追弔会は午後一時半より厳修致します。

西光寺本堂

## ●今月のことば●

今年も一月九日～十六日まで、京都本願寺（本山）で御正忌報恩講が営まれました。十五日の逮夜法要に引き続き、ご門主様のご親教（法話）を述べられました。

その一部分をここで紹介したいと思います。（本願寺新報より）

報恩講とは、宗祖親鸞聖人のご恩に報いるという意味であります。そのご恩とは阿弥陀如来の救いを説いて下さったことですから、阿弥陀如来の恩徳を味わいたいと思います。

私達は、「火宅無常（かたくむじょう）」といわれる迷いの世界に生きています。仏に成ること、成仏が、釈尊以来、世界の仏教に共通する根本的解決です。しかし、現代日本では仏に成ろうと努力している方があります。この世では至難のことです。

浄土真宗の特色は、この世ではなく、お浄土での成仏に向かつてこの人生を歩むことです。まずはこの世を、阿弥陀如来のはたらきを受けて精いっぱい生きることです。阿弥陀如来は光明無量、寿命無量ですから、空間と時間に限りがない、智慧と慈悲の如来さまです。そして、阿弥陀如来がいらっしゃる国土が、お浄土です。それは、私たちがある娑婆世界を超えていますから、阿弥陀如来も、お浄土も、そのはたらきも、直接見ることはできません。

そこで、阿弥陀如来の智慧と慈悲は、お名前である「南無阿弥陀仏」という人間界の言葉、お念仏となつて、私の所に届けられました。自分の欲望に任せたままで、迷いの人生を繰り返し、どこへ迷いこんでしまいかわからない人間です。この私を捨ててはおけないというお慈悲、「南無阿弥陀仏」が私の心に届くことが信心ですが、私の育てた心ではありませんから、他力の信心です。他力の信心が因、種となつて、往生成仏というこの世の根本問題が解決されます。

阿弥陀如来の救いは、釈尊、お釈迦さまの説法である經典によつて、

ご本願としてこの世にあらわれ、その真意が七高僧をはじめ多くの方によつて明らかにされました。それを受けて親鸞聖人が私たち凡夫にふさわしい教えとして開かれたのが、浄土真宗です。

比叡山でのご修行、法然房源空聖人のご教化に遇われたこと、北陸のご流罪、関東での伝道と『教行信証』などのご執筆、そして晩年の京都での「ご和讃」などのご制作と、どこを見ても阿弥陀如来の救いを私たちのため、私のために伝えてくださるご苦労でした。

親鸞聖人がお出ましく下さったおかげで、私が、往生浄土の道を歩ませていただけることをあらためて有り難く味わわせていただくことであります。

これから、阿弥陀如来のご恩、親鸞聖人のご恩に報いる日々を過ごさせていだきたいと思ひます。

### この世の救いは往生成仏定まること

合掌



浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一七二

電話 〇七二一六二二一四七九四

FAX 〇七二一六二二一九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>